

## 実践報告

# 教育支援センターにおける多重知能 (MI) 理論を 活かした英語・外国語活動の実践 —通室生の向社会的スキル育成をめざした活動の工夫—

瀧本千鶴

## 1 問題意識と目的

中央教育審議会 (2021) は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」を掲げた。その実現に向けた方針の1つに、不登校児童生徒への対応として、教育支援センターの機能強化を挙げている。佐藤 (2006) は、不登校の子どもたちへの心理・教育的支援は子どもの社会性の発達や学力の補充、上級学校への進学など多方面にわたったときにはじめて完結するとしている。そのためには、個別カウンセリングによって安定した子どもが教育支援センターを含むさまざまな場に参加することの重要性を指摘している (pp. 176-177)。教育支援センターに関する研究は、実態や課題の把握についてのものが多く (樋口, 2016 など)、個別最適な学びと協働的な学びの支援の実践と効果の検証に関する研究は管見の限り見当たらない。不登校児童生徒への対応として「いじめ・不登校等予防的生徒指導」の実践プログラムを実践してきた栗原・井上 (2011) は、よりの確な支援を構築するために、「個人と関係の調和」である「適応」ではなく、「本人が感じている SOS の度合い」である「適応感」に注目している。そして、児童生徒の学校や学校以外の場での適応感の実態を把握するために、学校適応感尺度アセス (ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres : 以下、アセスとする) を開発して、その活用を全国の小中学校や高等学校に広げている (pp. 8-9)。これらのことから、教育支援センターの機能を生かして、アセスを用いて教育支援センターに通う児童生徒 (以下、通室生とする) の適応感等の理解を深め、ニーズを的確に分析することができれば、不登校児童生徒においても、個別最適な学びと協働的な学びをめざすことが可能になると考える。

個別最適な学びと協働的な学びの支援に有効な理論として、8つの知能 (言語的知能, 論理数学的知能, 音楽的知能, 身体運動的知能, 空間的知能, 対人的知能, 内省的知能, 博物的知能) を取り上げた Howard Gardner の多重知能 (Multiple Intelligences : 以下、MI とする) に注目した。8つの能力について、本田 (2006) は、それぞれ情報の受容や処理の仕方が異なるため、子どもたちの脳をバ

ランスよく発達させるような学習方法を展開していくと、授業や友だちの伝えたいことがわかりやすくなり、その結果、学習意欲が増し、人間関係も活発にすることができるとし、MIを活用した授業づくりを提案している (pp. 12-13)。外山 (2010) は、特別支援学級の外国語活動において、指導案に工夫を凝らしたり、多様な子どもに対応するように指導法を改善したりするなど、MIを考慮した授業を展開することによって、子どもの外国語活動への興味・関心を高めることができることを実感したと述べている (pp. 26-28)。同様に、林 (2011) もMIを応用した外国語の指導が技能向上や学習、指導者への満足度においても有効であったとする (pp. 83-84)。つまり、学習意欲や対人関係などの適応感を高めるためには、MIを活かした活動が有効であるといえるだろう。栗原・井上 (2011) は、教師による「子どもの向社会的スキルを伸ばし、友人が相互にサポートし合うような関係を構築するような取組をすること」を通じて侵害的な関係を改善し、「学習的適応」感を改善することが可能になる、としている (p. 13)。これらのことから、通室生の「学習的適応」感を高める学びの支援には、MIを活かした向社会的スキル育成をめざす活動が効果的であると考えた。具体的な活動領域としては、上記の外山 (2010) や林 (2011) が子どもの興味・関心の高まりを実感した外国語活動を選び、特にMIを活動に具体化した林 (2011) の提案する英語・外国語活動を実践することにした。

本実践において、英語・外国語活動の効果を高めるために、MIやアセスの指導理論に基づいた以下の3つの支援方針、具体的には、1) 通室生同士のかかわりを増やすために、筆者が通室生をつなぐ場を英語・外国語活動の中に意図的に設ける、2) 通室生個々の好み、得意な分野や適した学び方を活かした活動やグループを構成する、3) 向社会的スキルを高めるために、内省的知能と対人的知能育成に重点を置いた活動を工夫する、に基づいて実践する。なお、1)～3)の具体的な手法や活動構成については、本田 (2006) の理論を採用する。本実践では、3つの支援方針に基づいて、向社会的スキルを高めるために内省的知能と対人的知能育成に重点を置いた活動に工夫することで、教育支援センターにおけるMIを活かしたより効果的な活動の実践を行うとともに、その効果を検証することを目的とする。以下でさまざまな背景から不適応を起こしている児童生徒が在籍するA市の教育支援センターにおける1年間の英語・外国語活動の実践を報告する。

## 2 先行研究の概観

本実践で活用した以下の3つの先行研究について述べる。

### (1) 学校適応感尺度アセス (ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)

栗原・井上 (2011) は、学校適応感には、学校環境を構成するさまざまな場面が影響する領域別の適応感とは別に、家庭や地域など、学校以外の影響も反映する全体的適応感があり、児童生徒の適応にかかわる問題の発見と支援という視点からは、この全体的適応感を把握しておくことが必要である、とする (pp. 9-10)。そして、アセスはアンケートによる個人特性票、学級平均票、学級内 (間) 分布票に基づいて、本人の主観的な適応感の全体を、包括的かつ多面的に判断できるものとして開

発された (pp. 15-46)。開発されたアセスは、6つの側面 (生活満足感, 教師サポート, 友人サポート, 向社会的スキル, 非侵害的關係, 学習的適応) から学校適応感をとらえている (pp. 10-11)。児童生徒の「学習的適応」感の改善のためには、学習に関する教師の直接的サポートとともに、対人関係を媒介とした教師サポートが、学年が上がるほど重要であることを示唆している。さらに、教師が子どもの向社会的スキルを伸ばし、友人が相互にサポートし合うような関係を構築するような取組をすることを通じて侵害的な関係を改善し、「学習的適応」感を改善することが可能になる、としている (p. 13)。

本実践では、支援方針の1)と3)で挙げた、学習に関する教師の直接的サポートとともに、対人関係を媒介とした教師サポートを取り入れることで向社会的スキルを高めたい。また、特に筆者が注意して関わった1名の生徒の個人特性票や、通室生全体を集団としてとらえた学級内分布票から得られたアセスメント結果を用いて集団と個の支援に役立てることで、より一層英語・外国語活動の効果を上げることを目指すことにした。

## (2) MI と学校適応

栗原・井上 (2011) による「学校適応感」と同等のものともみなせるものに、永江 (2008) による「学校適応」がある。永江 (2008) によると、子どもの学校適応は対人的知能と内省的知能がかかわる、としている (pp. 154-155)。さらに学校適応にかかわる力の1つに向社会的行動を挙げている。向社会的行動とは、他者のためになり、その人からのお礼などを望むことなく、自発的に行われる行動を指し、具体的には援助・協力行動、分配行動、寄付・贈与行動がある、とする (p. 167)。なお、永江 (2008) は「向社会的行動」を用いているが、本実践では、栗原・井上 (2011) のアセスにおける「向社会的スキル」を用いて、その育成を目指すとともに効果の検証を行う。

## (3) MI の視点に基づいたグループの構成と授業プランの設計

本田 (2006) は、MI の視点に基づいたグループの構成と授業プランの設計を行っている。まず、行動観察や担当している教師からの聞き取りによってクラスの子どもたちの知能の傾向を知る。次に活性化している知能と伸ばしたい知能を見立てる。そして、見立てを基に彼らの好きや得意から8つの知能の早見表を参考にして彼らに適した学習方法を支援者が理解する (pp. 172-173)。それらに基づいて、本田 (2006) の提案する知見を参考にして授業プランを設計する (pp. 180-196)。

本実践においては、本田 (2006) による MI の視点に基づいたグループの構成や授業プランの設計の具体的な手続きを援用して、支援方針2)の通室生個々の好み、得意な分野や適した学び方を活かした活動やグループを構成することによって、通室生の学習意欲が増し、人間関係も活発にすることが可能となる効果的な英語・外国語活動をめざした。

### 3 実践の方法

MIを活かした本実践の方法について述べる。

本実践における協力施設、対象通室生、実施時期、実施方法は以下の通りである。

○英語・外国語活動の実践協力施設 A市教育支援センター（以下、協力施設とする）

○協力施設の活動の特徴

協力施設では、「意欲を高め、能力にめざめる場」、「人とかかわり方を学ぶ場」として集団での体験的な活動を支援する姿勢をとっており、本実践の向社会的スキル育成の土壌があるといえる。

○実践対象とした通室生 小学校3年生から中学校3年生までの16名

○同英語・外国語活動の実施時期と回数 20XX年5月9日から20XX年+1年2月20日の10回

○活動の特色

協力施設に定期的に勤務するアメリカ人のALTが提供する異文化の情報を、MIの視点に基づいた活動にアレンジした異文化理解を行う。

○筆者の本実践での役割 本実践はアクションリサーチであるため、授業者は筆者である。具体的には英語・外国語活動の実施及び実践の成果、課題の考察とまとめの2つの役割を果たしている。

○MIを活かした英語・外国語活動の実施方法

先行研究の成果をふまえて、本実践では英語・外国語活動が、以下の4つの具体的方法により、学校や学校以外で不適応の状態にある通室生全体の「学習的適応」感につながる向社会的スキル育成へ及ぼす有効性を明らかにする。

①本田（2006）の手続きを援用して、関係教職員からの聴き取り、教育支援センターでの観察による子どもの知能の傾向から活性化している知能と伸ばしたい知能を見立てる（pp. 159-169）。

②本田（2006）が挙げた、通室生個々の好み、得意な分野から8つの知能の早見表を参考に、彼らに適した学び方のアセスメント結果に基づいて、得意とする知能別グループ活動を設定する（pp. 170-179）。

③それらを活かした英語・外国語活動を、林（2011）が挙げた活動（p. 86）を参考にしてアレンジを加える。

④MIの視点を活かした10回の活動プランを立てて、英語・外国語活動を実施する。

○成果の検証方法

5月9日、10月4日、2月20日に3回の質問紙調査（アセス）と逐語録からの談話分析により成果を検証する。

・検証の手法 アクションリサーチ法に基づく授業開発と質問紙調査による効果検証

- ・逐語録（指導中のメモに基づいて指導後に思い出しながら記録したもの）からの談話分析

## 4 MIを活かした英語・外国語活動の構想と概要

通室生全体と個々の通室生のアセスメント結果から、3つの支援方針を踏まえて支援方法を明らかにし、向社会的スキルを高める英語・外国語活動を構想した。以下にその概要を述べる。

### (1) 通室生全体と個別の通室生の状況

本実践の重要なアセスメントとして、在籍校の教員や協力施設職員の話による通室生全体の不登校の主な要因と通室生の協力施設での過ごし方の特徴、筆者が個別の支援の対象とした1名の通室生の状況をまとめたものを述べる。

#### 1) 通室生全体の不登校の主な要因と協力施設での過ごし方の特徴

協力施設には、約16名の小・中学生が通っている。筆者が支援を始める前の前年度は全員が全く学校に通っていない状態であった。関係する教職員の話から、不登校になった主な要因として、「学校での人間関係でのつまずき」が9名、「保護者の感情の不安定さ」が4名、「勉強が全くわからない」が3名であった。また、スクールカウンセラーの話では、通室生はこれまで自分を否定されるような経験によって自信を失っており、その結果、不安を感じて行動や活動を避けてしまう傾向にあるとのことであった。筆者の観察から、通室生は部屋の壁際に座って遠くからお互いの様子をうかがいながらぼんやりと過ごしたり、他の通室生が職員から離れたのを見計らって職員に話しかけたりして過ごすことがわかった。

#### 2) 筆者が個別の支援の対象とした通室生（以下、通室生Bとする）の状況

中学校3年生の通室生Bは、中学校1年生の頃の部活動の人間関係のトラブルから不登校になった。協力施設では、常に明るくふるまっている。苦手な勉強を頑張りたいという気持ちを強くもっており、高等学校進学をめざしている。通室生全体の変容とともに、通室生Bの変容も注目したい。

### (2) 英語・外国語活動に加えられた3つの支援方法

3つの支援方針から、通室生の向社会的スキルを高めるために英語・外国語活動に加えられた支援方法は以下3点である。MIの中の内省的知能と対人的知能育成に重点を置いた支援方法を考案した。

- 1) 通室生個々の好み、得意な分野や適した学び方を把握して、通室生同士の会話につなげる
- 2) 得意とする知能別グループ活動等、通室生が自分で選択して決定する場面をつくる
- 3) 一般財団法人特別支援教育士資格認定協会（2020）を参考に、グループ内で支援の教示、モデリング、リハーサルを行うことで、自他の感情や意図を認識させて援助要請や支援のスキルを高める

### (3) MIを活用した英語・外国語活動づくり

MIを活用した英語・外国語活動づくりにおいて、本田（2006）のMIを活かしたグループ構成の

あり方と教科の特性を生かした活動構成を以下のように援用した (pp. 180-196)。

1) 行動観察等から通室生の活性化している知能と伸ばしたい知能を見立てる

行動観察から、16名の通室生は表1にあるグループ1とグループ2に分けることができた。通室生Bは1のグループに入った。

表1 通室生16名のMIに基づいたグループ分けと活性化・伸ばしたい知能

グループ	活性化している知能	伸ばしたい知能
1:7名 活動的。作業・実験が好き。じっと話を聞いているのは苦手。	「身体・運動」「対人」 「視覚・空間」	「博物学」「内省」
2:9名 従順で受け身。自分から考えたり行動したりするのは苦手。	「言語・語学」 「音楽・リズム」 「視覚・空間」	「論理・数学」 「博物学」「対人」 「身体・運動」

2) 通室生の好きや得意から8つの知能の早見表 (pp. 172-173) を参考にして彼らに適した学び方を筆者が通室生に提案して、通室生自身に決めさせる

通室生の自主性を大切にするために、通室生自身に学び方を決めさせることにした。これは、筆者のオリジナルである。表2及び表3は、1)のグループ1とグループ2の通室生とともに作成した活性化したい知能と伸ばしたい知能一覧である。

表2 グループ1の知能と好み、得意な分野や適した学び方

	知能	好きなこと	得意なこと	適した学び方
活性化している知能	身体・運動的知能	作業をする	ものづくり	体験学習(実験・作業)
	対人的知能	人と関係をつくる	他者理解・相互理解	グループ学習
	視覚・空間的知能	組み立てる 設計映像をみる	目に見える変化を記憶する	視覚刺激でやる気を起こす工夫をする
伸ばしたい知能	博物学的知能	アウトドアの活動	情報の収集	情報を表にする
	内省的知能	自分の関心を追求する	興味・目標の追求	明確な役割をもつ

表3 グループ2の知能と好み、得意な分野や適した学び方

	知能	好きなこと	得意なこと	適した学び方
活性化している知能	音楽・リズム的知能	音楽を聴く	メロディーを覚える	リズムを用いた記憶
	視覚・空間的知能	空想・夢想する	映像を想像する	絵・図式化して学ぶ
	言語・語学的知能	話をする	文・公式をそのまま覚える	流れをつかみやすいストーリーにして覚える
伸ばしたい知能	博物学的知能	フィールドワーク	カテゴリーをつくる	情報を表にする
	論理・数学的知能	はっきりした手順や目的意識をもつ	問題解決	プロセスが理解しやすいチャート学習
	身体・運動的知能	身体を動かす	ものづくり(工芸・工作・機械)	身体感覚を活用した理解・記憶
	対人的知能	人と関係をつくる	他者理解・相互理解	グループ学習

3) 通室生がどの知能を使うと学ばせたい内容に興味・関心をもつか、内容を理解しやすい知能はどれか、考えを深める知能はどれかを考えて MI を活かした単元全体の活動を定める

林（2011）が提案した英語・外国語活動（pp. 85-88）に、2) の通室生に適した学び方を活かして筆者が作った異文化理解の単元全体の活動内容が、表 4 である。

表 4 英語・外国語活動に用いる 8 つの知能を活かした活動内容（林（2011）の表を筆者が改変）

8 つの知能	知能を活かした活動内容
音楽・リズムの知能	異文化について音楽で学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>テンポの良い音楽に合わせて手拍子を打ったり足を鳴らしたりする。</li> <li>日本語の歌詞で意味を理解した上で、歌詞に込められた思いを味わう。</li> </ul>
身体・運動的知能	体験を通じて異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>料理、工芸、出し物によって異文化の行事を楽しむ。</li> </ul>
言語・語学的知能	意味を考えながら異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>ALT の説明を聞いたり質問したりして異文化を理解する。</li> <li>提示されたものを読んだり、見本を見ながら書いたりして英語に触れる。</li> </ul>
内省的知能	自分の発想を生かして異文化を体験する <ul style="list-style-type: none"> <li>グループ活動やさまざまな人との交流を通じて、自分の気持ちや考えを振り返る。</li> </ul>
対人的知能	グループやペアでのやりとりから異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>相手のことばに興味をもったり、作業を通じて人間関係をつくったりする。</li> </ul>
論理・数学的知能	活動の目的を自分なりに考え、心にとめて異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>目的や意義を理解して自己表現に活かす。</li> </ul>
博物学的知能	いろいろな異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>書籍やインターネットなど身近な手段を使って情報を集めて活動を行う。</li> </ul>
視覚・空間的知能	絵や図、写真を使って異文化を学ぶ <ul style="list-style-type: none"> <li>理解したことを絵や図、チャートや表などにまとめてみる。</li> </ul>

4) 2) の通室生に適した学び方を取り入れた英語・外国語活動の活動案を立てる

本実践の単元目標として、異文化に触れる活動を通じて、自分の役割を果たしながら協力して活動することで、通室生がかかわりあうスキルや学習方法を身に付けることを設定した。単元の評価基準として、(1) ALT の教員による外国語の音声や、語彙、表現などについて、日本語と外国語との違いに気付き、それらに慣れ親しむことができる、(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる、(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとすることができる、である。

表 5 は、本田（2006）による小学校 4 年生理科の〈生き物のくらし〉の 11 時間分の授業プラン概要と活用する知能例の表（p. 184）を参考に、筆者が英語・外国語活動の〈異文化理解〉の 10 回分の授業プラン概要と活用する知能例を挙げたものである。ただし、通室生の発達段階を考慮してアレンジを加えた。なお、協力施設では、通常の学校とは異なり、柔軟に時間を使うことができるため、1 回の活動に 4 時間程度費やすことができたことを記しておく。

表5 英語・外国語活動の内容とその中で活用する知能活動の流れ

展開	回数	学習内容と知能活動の目標 (太字が目標となる知能内容と発問の一部)	主に活用する知能
導入	1回 4時間	(アメリカについて知る) ALTの自己紹介を通じて、アメリカについて興味をもち、気づいたことや疑問について話し合うことができるようにする。 <b>(本時の到達目標)</b> ① <b>絵や写真など情報の提示の仕方</b> がわかる。 ② 教職員と一緒に、 <b>日本での自分の生活を振り返りながら</b> 、気づいたことや疑問について考えることができる。 <b>発問：「日本で住むあなたの生活とどんなところに違いがあるかな？」</b> ③ 自分の気づきや疑問を基に、教職員の支援を受けながら <b>グループで協力して</b> 意見をまとめることができる。	言語・語学  視覚・空間 内省  対人
異文化理解と体験活動を通じて相互理解につなげる	5回 20時間	(ハロウィンについての理解、体験活動) 老人ホーム訪問に向けて、ハロウィンについて知ってもらうために自分たちで考えて準備をすることができる。 <b>(本時の到達目標)</b> 老人ホーム訪問に必要なことを学ぶ。 ① ハロウィンについてALTに質問して、わかったことを <b>グループで画用紙にまとめる</b> 。 ② スーパーでカボチャを購入するところから始めて、 <b>本で作り方を見ながら提灯を作る</b> 。 ③ くりぬいたカボチャを使って <b>パンプキンケーキやおやつをつくる</b> 。 ④ <b>インターネットで衣装について調べて衣装をつくる</b> 。 ⑤ <b>場を盛り上げるためのダンスの練習</b> をする。 <b>発問：「一人ひとりで考え込んでいても練習できないよね。どう動き始めたらいいかな？」</b>	論理・数学  言語・語学  視覚・空間  博物学 博物学 身体・運動 博物学、身体・運動 対人、身体・運動、 音楽・リズム
	3回 12時間	(12月の交流会に向けた準備) 学校関係者、保護者、ALTにクリスマスの雰囲気味わってもらおうおもてなしの準備をすることができる。 <b>(本時の到達目標)</b> 交流会の準備に必要なことを学ぶ。 ① <b>近くの山に行ってクリスマスリース制作に必要な</b> くずのつた、まつかさを集める。 ② 何人かで <b>協力しながらクリスマスリースを作る</b> 。 ③ ALTが用意したクリスマスカードの見本を参考にしながら <b>カードを作る</b> 。 <b>発問：「誰にあげるか想像してごらん。何をどうやって書こうか？」</b> ④ 『AMAZING GRACE』の合唱練習をする。	論理・数学  博物学  対人、視覚・空間 対人、身体・運動  内省、対人、 身体・運動 音楽・リズム、対人
	1回 4時間	(ALTのお別れ会) アメリカに戻ることになったALTに感謝の気持ちを自分にとって伝えやすい方法で伝えることができる。 <b>(本時の到達目標)</b> これまで学習した内容や方法を使ってALTに感謝の気持ちを伝えることができる。 <b>発問：「今まで先生といろいろなことをやって気持ちを伝えてきたね。どうやって伝えようか？ 今までしてきたことを思い出しながら近くにいる人と相談してもいいよ。」</b>	論理・数学、内省、 対人、言語・語学、 身体・運動など



## 5 支援の具体的展開

以上のアセスメント結果や3つの支援方法に基づいて行った具体的展開は以下の通りである。

### 支援方法1) 通室生の好き、得意や適した学び方を把握して、通室生同士の会話につなげる

筆者は、普段から自分から関わろうとしない通室生同士を、会話を通じてつなげることを心がけた。

資料1は、筆者とある通室生（以下、Cとする）との会話に別の通室生を誘う様子である。

(C)「先生が紹介してくれた曲の日本語の歌詞って、よく読んだら（意味に込められた思いが）熱いよね。」  
(筆者)「そうなんよ。この曲は私にとって思い出の曲でね。あと『The Body Guard』っていう曲も大好き。」  
(C)（周囲に聞こえる少し大きい声で）「へー、聴いてみるわ。じゃあ明日、私のお勧めの曲持ってくる。」  
(筆者)（近くにいる他の通室生を見ながら）「Cさんがお勧めの曲持ってきてくれるんやって。聴きたいね〜。」通室生のほとんどが英語の曲をよく聴いていることを筆者は知っていた。  
(C) 翌日「先生、これ聴こう。アバの『ダンシングクイーン』は最高や。」  
(筆者)「うわあ、Cさん、ありがとう！持ってきてくれたんや。聴こう！」（周囲の通室生を手招きする）  
(他の通室生)（聴きながら）「かっこええ！」「この曲、聞いたことある。有名やんね。」  
彼らが口ずさんだり体揺らしたりして、場は和やかな雰囲気包まれた。帰り際に通室生Cは筆者に、  
(C)「何か言われるかなってちょっとだけ心配やったけど、みんなが聴いてくれてよかった。何かうれしい。」

資料1 通室生Cと筆者の会話に、筆者が別の通室生を誘う様子

### 支援方法2) 得意とする知能別グループ活動等、通室生が自分で選択して決定する場面をつくる

筆者は、まず、発表や交流会の演出に必要な仮装の衣装やパーティーの写真を通室生に提示して、通室生に好きな演出をインターネットで検索させた。また、筆者は通室生とともに、発表や交流会、パーティーに向けて、だれが、何を、どのようにするのかを話し合い、フローチャートで示すようにした。それらを見て、通室生Bを含むグループ1は、発表を選び、グループ2は準備を選んだ。

自分に役割があることからグループ1とグループ2ともに、全員が協力しなければ完成できない、という意識が生まれ、話し合ったり困っている人はいないかと配慮したりするようになった。

### 支援方法3) グループ内での支援の教示、モデリング、リハーサルを行うことで、自他の感情や意図を認識させて援助要請や支援のスキルを高める

支援方法2)において、通室生同士のさまざまな場面をとらえてグループ内での支援の教示、モデリング、リハーサルを行うことで、自他の感情や意図を認識させて援助要請や支援のスキルを高めることを心がけた。通室生Bは、人生で初めて人前で発表する経験に挑むことになった。

資料2は、通室生Bや他の通室生に対して援助要請や支援のスキルを高めることを意図した会話である。その結果、通室生Bは、希望したものの、自分一人では難しかったり勇気が出なかったりする活動においても「〇〇くん、これ手伝ってくれる?」、「〇〇ちゃんが一緒にしてくれたらできそう。」等の言葉が出るようになった。

(B)「先生、発表原稿協力してね。事前にちゃんと練習したいから。」  
 (筆者)「わかった。もちろん協力するよ。そのやる気、いいねえ。」  
 (B)「ああ、よかったあ。」  
 (筆者) (同じグループの通室生も見ながら)  
 「原稿の内容も大事。それと同じくらい今回の老人ホームの発表で大事なものは何だと思う？」  
 (同じグループの通室生)「お年寄りやけん、ゆっくり読んであげるとか？」「文を短めにしたらええんちゃうん。」  
 (筆者)「そうや、ええこと言うなあ。」  
 (B)「あ、そっかあ。なるほどね。」(と言いながらメモをする)  
 (筆者)「今みたいになんかでもわからないことや不安なことがあったら、同じグループの人に『どうしたらいい？』と『これでいいのかなあ』って聞いたらかうやって教えてくれるよ。(教示) (他の通室生を見ながら) そうよね？」  
 (同じグループの通室生)「うん。」  
 (筆者)「じゃあ、ちょっと今の質問からの流れを先生がするから、みんな見て。」(モデリング)  
 (中略)「今のをもう1回みんなで作ってみよう。」(リハーサル)

資料2 通室生B, 同じグループの通室生への教示, モデリング, リハーサルの会話の内容

## 6 第1回と第3回の学校適応感尺度アセスの結果と考察

はじめに、学校適応感尺度アセスの学級内分布票の結果と考察を示す。図1・2の学級内分布票は、点のマーカの色と形の4段階で全体的適応感である生活満足感を示している。30未満は赤い△、30以上40未満はオレンジの◇で要支援、40以上50未満は緑の○、50以上は青い○で適応群として表示されている。図1を見ると、1回目は全体に「対人的適応」感・「学習的適応」感ともに左下の要支援領域にあり、さらに支援の緊急を要する△や◇がほとんどであった。図2の3回目は全体的に依然として左寄りであるものの、要支援領域から抜け出しており、ほとんどの通室生が○に変化していることが分かる。一方で、要対人支援領域から抜け出したものの、依然として要学習支援領域にあることも見て取れる。F-16は通室生Bであり、通室生の中で最も大きな伸びを示した。10回のMI活用した英語・外国語活動の中で、筆者は向社会的スキルの教示、モデリング、リハーサルを繰り返した。その結果、互いに声を掛け合ったり、自分の役割やできることで協力しようしたりする姿勢が見られるようになった。これらのことから、通室生の向社会的スキルを伸ばし、通室生同士が相互にサポートし合うような「対人的適応」感を高めるような取組につながったと思われる。一方、「学習的適応」感は、学習内容の積み重ねが不足していることから、在籍校の定期テストに取り組む際に苦手意識を軽減できず、低い結果に終わっている。

さらに、支援方法1)～3)についての考察を示す。支援方法1)では、通室生個々の好み、得意な分野や適した学び方を把握して、通室生同士の会話につなげることに取り組んだ。支援当初は、部屋の壁際に座ってお互いの様子をうかがう姿が見られたが、徐々に筆者をはじめとする教職員の周囲に集まって会話をするようになり、英語・外国語活動が進むにつれて、積極的に通室生同士で話をするようになった。支援方法2)では、得意とする知能別グループ活動等、通室生が自分で選択して決定

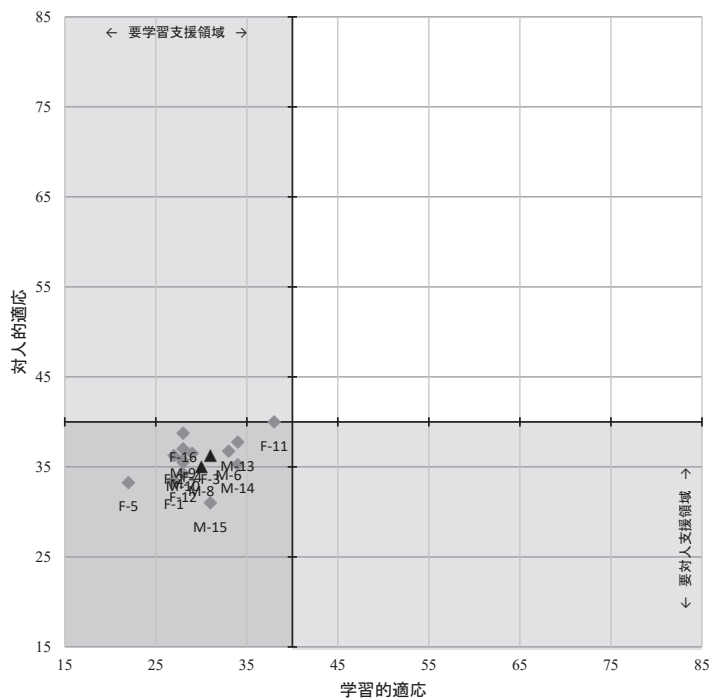


図1 第1回（5月）学級内分布票

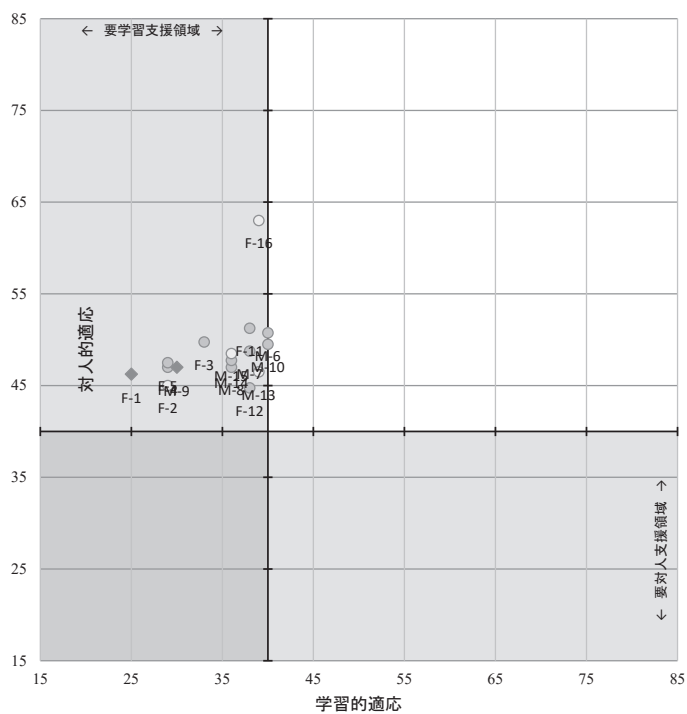


図2 第3回（2月）学級内分布票

適応次元		第1回目	第2回目	第3回目	最終回のコメント	適応次元の特徴
生活満足感		33	50	52	特になし。	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示します。
対人的適応	教師サポート	43	54	59	特になし。	担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好だと感じている程度を示します。
	友人サポート	31	48	50	特になし。	友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示します。
	向社会的スキル	46	51	60	特になし。	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている程度を示します。
	非侵害的關係	35	53	83	特になし。	無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示します。
学習的適応		28	34	39	学習への適応感がやや低くなっています。学習の様子を確認しましょう。	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示します。

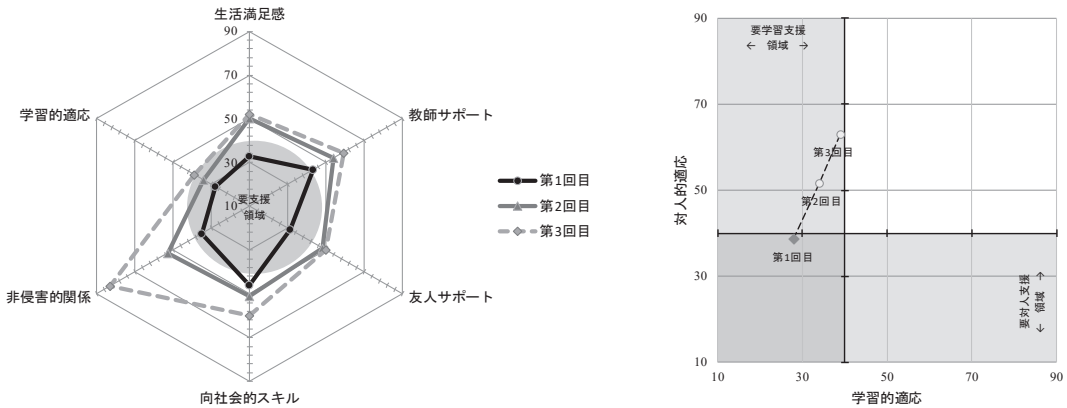


図3 通室生 B の個人特性票

する場面をつくった。自分たちの希望による選択だけではなく、通室生 B が中心となって消極的な人に声をかけたり少ない人数の役割にも気を配ったりして分けていた。活動後の振り返りシートには、「カボチャの提灯のデザインを友だちと考え合ったので楽しくできました。」「他の人に聞いたり、頼んだりすることができるようになった。」「出し物の練習はみんなと一緒に頑張ることができた。」「ダンスはみんなでやると迫力がでてすごかった。」等の感想が寄せられた。これらのことから、それぞれが違う役割を果たしながら向社会的スキルを身に付けつつあり、学校外の環境である協力施設での英語・外国語活動に満足を感じ始めているといえるのではないかと推察される。支援方法3)では、グループ内での支援の教示、モデリング、リハーサルを行うことで、自他の感情や意図を認識できるようになり、援助要請や支援の向社会的スキルが高まりつつあると思われる。

次に、通室生 B の変化について述べる。図3から、向社会的スキルを含む6つの適応次元が変化していることが分かる。特に通室生 B の非侵害的關係が大きく伸びている。通室生 B は、英語・外

国語活動において明るく積極的に他の通室生と協力することで自分の居場所を見つけて安心感を得たと思われる。「学習的適応」感の数値は低いままだったが、自分なりに学習に励むことで希望の高等学校に進学することができた。

## 7 まとめと今後の課題

教育支援センターにおける MI を活かした英語・外国語活動の有効性を高めるために、対象の通室生全体のアセスメント結果にしたがって、支援方法 1)～3) を明確にした。そして、それらを踏まえて具体的に計画と実践を行った。その結果、通室生全体の向社会的スキルを含む「对人的適応」感の高まりが見られ、特に通室生 B において最も大きな伸びが見られた。しかし、本実践の今後に残された課題は 2 点ある。1 つ目は、通室生 B 一人を個別の支援対象として効果の検証を行っている点である。2 つ目は、教育支援センターにおけるその他の活動による影響の有無を検証できていない点である。これらの課題に向き合うには、複数の通室生への個別支援や、新たな通室生全体での包括的支援を検証することで、教育支援センターにおける MI を活かした英語・外国語活動の効果の検証を検討する必要がある。これからも子どもたちの教育的ニーズをしっかりと把握して MI を活かした個別最適な学びと、協働的な学びの実現をめざして研究を深めていきたい。

### 【参考文献】

- 中央教育審議会 (2021) 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」
- 樋口くみ子 (2016) 教育支援センター (適応指導教室) の「整備」政策をめぐる課題と展望 <教育と社会> 研究, 26, 23-34.
- 一般財団法人特別支援教育士資格認定協会編 (2020) 特別支援教育の理論と実践 II 指導, 金剛出版.

### 【引用文献】

- 林桂子 (2011) MI 理論を応用した新英語指導法, くろしお出版.
- 本田恵子 (2006) 脳科学を活かした授業をつくる, みくに出版.
- 栗原慎二・井上弥 (2011) アセスの使い方・活かし方, ほんの森出版.
- 永江誠司 (2008) 教育と脳, 北大路書房.
- 佐藤修策 (2006) 不登校 (登校拒否) の教育・心理的理解と支援, 北大路書房.
- 外山節子他 (2010) 英語の絵本活用マニュアル, コスモピア.